

一九七四年に制作・放送されたテレビアニメ「宇宙戦艦ヤマト」は、それまで子供向けとされてきたテレビアニメを、幅広い層から支持される作品へと押し上げた代表作の一つと言われています。

物語の中で描かれる地球は、異星人国家からの攻撃によって放射能に汚染され、人類の生存が危機的状況に陥っているという設定です。これは、米ソを軸とした東西冷戦による核戦争の脅威や、経済発展を最優先した結果として各地で多発した公害問題を反映したものと見るができます。

さらに物語では、別種族の異星人国家から地球を再生する装置を譲り渡すというメッセージが届けられ、その受領のために十五万光年彼方の宇宙に浮かぶ惑星を目指すこととなります。敵からの妨害を退けながら使命を果たし、最終的に地球は無事に再生されるといふ筋立てになっています。

もちろん、架空の物語ではありませんが、その内側に込められた社会へのメッセージは決して現実離れしたものではありません。異星人から攻撃を受けることこそないにせよ、人類自らが人類の生存を脅かす行為は、放送から半世紀が過ぎた現在においても、身の回りに様々な形で存在し続けています。私たちが実践に取り組んでいる「地球倫理」とは、第二代理事長・丸山竹秋が提唱した「地球人の地球人による地球人のための倫理」であり、人類が自らの生存を脅かす行為をやめ、誰もが安心して安全に暮らせる平和な地球を目指すことにあります。



感謝の心でつなぐ 地球への恩返しと未来

それは単に自然環境を保護して地球を守ろうとする活動に留まるものではありません。とはいえ、私たちは、生きるために様々な自然由来のものを消費しています。また、その生産を担う企業活動においても、自然環境の一部に手を加え元の姿とは異なる形に変えてしまうことが少なくないはず。そのため、もし「地球倫理の実践」として「地球を守るために」との理由で自然由来のものを一切消費せず自然環境にも手を加えないという姿勢を徹底すれば、人類が存在できなくなるというジレンマが生じます。では、一体どうすればよいのでしょうか。

大切なことは、「地球を守るために使われない」のではなく、「人類のために地球の何かを使ったのであれば、地球のためになることを人類の力を尽くしてお返しする」という姿勢でしょう。たとえ地球を再生する装置を異星人から譲り受けなくても、人類には長い歴史の中で積み上げてきた知恵があり、それを実行可能にする技を生み出すこともできます。

さらに、その前段として、地球の何かを使う際に「感謝して使う」という心も欠かせないでしょう。感謝があれば無駄に使うことがなくなり、「ありがたいな」と思うからこそ、「地球にお返ししなければ」という行動へとつながっていきます。

こうした心で行動する人を世界中に増やしていくことで、地球をより良い星へと成長させ、次の世代へ胸を張って引き継いでいきたいものです。